

江亭驛口暫停旌
風剪林梢寒有聲

又是天涯幾日程 漁艇晚炊烟乍起
伏枕不堪思往事 殘燈獨坐夜三更

陳星漸落月初明

鳥啼簷角飛無定

【読み】

江亭驛口（えきこう）に 暫（しばら）く旌（はた）を停（とど）む また是れ 天涯（てんがい）幾日の程ぞや
漁艇 晚炊（ばんすい） 烟（けむり）乍（たちま）ち起（おこ）り 陳星（ちんせい） 漸（ようや）く落ちて 月初
めて明らかなり 鳥（とり） 簪角（えんかく）に啼（うずく）め 飛（と）ぶこと定（さだ）まらず 風（かぜ） 林梢（りんしょう）を剪（き）つて
さ聲（こゑ）有（あ）り 枕（まくら）に伏（ふく）して往事（おうじ）を思うに堪（たま）えず 燈（ひ）を殘（のこ）して 獨（ひとり）り坐す 寒（さむ）

夜 三更（さんこう）

【意味】

江辺の亭（旅の館）や駅の入り口に、しばらく旗（旅の一程）を止めた。またしても、はるか彼方への旅路：あと何日続くことだろうか。川辺では、漁夫の舟から夕餉の煙がふと立ちのぼる。夜更けて、夜の終わりを告げる星がしだいに沈み、月があらたに明るみ始める。軒端では鳥が鳴き、あちこち定まらず飛びまわつている。風が木の梢を切るように吹き抜け、寒さが音を立てていて。枕に伏して、過ぎ去ったことを思つのがつらい。灯の残り火の下、ひとり夜半（三更＝深夜）に座りつづける。

*旗：旗を指すが、旅の一程を象徴 *陳星：しだいに沈みゆく星々

*往事…過ぎ去った昔の事

【出典】宿江寧鎮（清・竇邇奇（とうりんき））

※この詩は、旅の途中で一夜を過ごす詩人が、異郷の寂しさ・人生のはかなさ・過去への思慕を、風や灯、鳥の声といった夜の自然描写を通して表現した作品です。

【出典】



ウィキメディア・コモンズ

國朝畿輔詩傳卷三- 實遜奇破

三月晦日作

野水滿橫塘蘿痕印短牆雨來旋鶴井風急亂鶯簧虛
牖納朝霽空亭受晚涼一卮聊自醉未曉尚春光

遣懷

年老鈔書讀逢人敢醉狂衣裳資草木談笑盡農桑蘿
徑招幽客山禽戀小堂桃源隨處有何必問漁郎

譙郡有懷

征馬長嘶古道傍江山猶是舊斜陽但看飛蓋稱才子
詎料當塗竊帝王細雨斜侵羅襪冷春風輕颺菜花香

國朝畿輔詩傳

卷三

七

千秋欲弔奸雄蹟野雉空飛過白楊

壽春署中雜咏

入公山上列連營千載如聞草木聲投水無鞭騎晉壘
賭棋有屐卻秦兵荒邱漠漠孤猿嘯落葉蕭蕭旅雁鳴
勝地名賢兩寂寞白雲蒼狗幾回更

宿江寧鎮

江寧驛口暫停旌又是天涯幾日程漁艇晚炊烟乍起
疎星漸落月初明鳥啼簷角飛無定風翦林梢寒有聲
伏枕不堪思往事殘燈獨坐夜三更